

「なまいきイントネーション」について

門屋, 飛央
九州大学大学院 : 博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/1809199>

出版情報 : 語文研究. 120, pp.60-69, 2015-12-25. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

「なまいきイントネーション」について

門 屋 飛 央

1. はじめに

福岡地方の小学生において、ある特定の場面における会話を観察すると、以下に示すような興味深いイントネーションが聞かれる。該当する箇所を下線を引き、音の上がり目を「[」、下がり目を「]」によって表す。

- (1) 同級生同士で、どちらが先に自分の悪口を言ったかで口げんかになった場面

太郎1：お前が先言ったろーが。

次郎1：言っとらんし。

太郎2：は？言ったろーが。

次郎2：言っ[てま]せーん。

太郎3：言ーまし]たー。

次郎3：証拠あるんです]かー。

太郎4：あり]まーす。サトーが聞ーてまし]たー。シミズも]でーす。

次郎4：そんなん証拠になりま]せーん。

- (2) 学級会で、掃除をさぼっていたという指摘に反論して言い争いになった場面

三郎1：せんせー、シロー君が掃除さぼってました。

四郎1：(三郎に向かって) さぼってま]せーん。ちゃんと見てくだ]さーい。

三郎2：(四郎に向かって) 見て]まーす。あ[そんでまし]たー。

四郎2：(三郎に向かって) あ[そんでま]せーん。嘘言わないでくだ]さーい。

上の(1)(2)は、どちらも小学校の同級生同士で、決着のつきにくいことに関して「水掛け論」のように対立して言い合いをしている場面である。共通語の丁寧体を用い、最終シラブルをぐっと低くする、という発話が交互になされている。会話の最初は通常のイントネーションで始まっているが、一方がこの特殊なイントネーションを始めると、すぐさま相手も同じイントネーションでこれに応じている。(1)であれば、「次郎2」の発話が引き金となり、それへの

反発（太郎3）、そしてまたそれへの反論（次郎3）という応酬が、まったく同じイントネーションによって繰り返されていくわけである。本稿では、こうしたイントネーションを、児童がいかにも生意気な態度で口論をしているように見えるところから、「なまいきイントネーション」と名付け、考察を行うこととする。

2. 「なまいきイントネーション」の特徴

2.1. 音声的特徴

2.1.1. 最終シラブル直前の下降と、その引き延ばし

「なまいきイントネーション」によって発話される際の形式は、共通語形の「*言って]な—い」「*言って]ね—」や、福岡方言形の「*言っと]ら—ん」「*言わん]し—」などが用いられることはなく、共通語の丁寧体が用いられる。また、丁寧体であっても終助詞（「*言ってません]よ—」）や接続助詞（「*言ってません]けど—」）等をつけた形で用いられることはない。「(シ) テマセン」「(シ) マシタ」「(シ) テクダサイ」など、言い切りの形でなければならない、かなり固定した形で用いられているといえる。

このイントネーションの音声的特徴を分かりやすく示すために、praatを用いてF0曲線を分析する。福岡市方言話者の女性（FF^(注1)）、熊本市方言話者の女性（KF^(注2)）、長崎市方言話者の男性（NM^(注3)）、佐世保市方言話者の女性（SF^(注4)）の方言話者の普段の言い方と「なまいきイントネーション」による言い方とを比較して図示することとする。まず、「言ってません」という形式の、普段の言い方を以下の図1に掲げる。普段の言い方での話者は「FF」のように、アルファベットの横に「'」を付す。以下、図の縦軸の数値はピッチを示し、横軸はモーラ単位で示している。

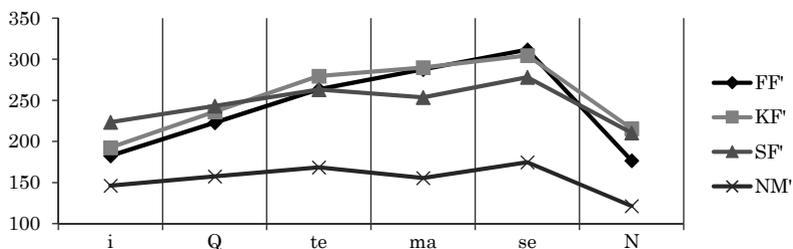


図1 普段の言い方での「イッテマセン」

図1をみると、普段の言い方では「イッテマセ」ン」と「セ」にアクセント核があることがわかる。次に、「なまいきイントネーション」で発話したものを、図2として以下に掲げる。

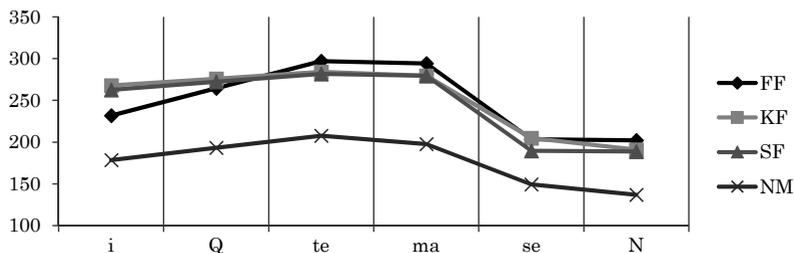


図2 「なまいきイントネーション」での「イッテマセ」ン」

図2をみると、「なまいきイントネーション」では「イッテマ」セン」という音調になっている。そして、「セン」という最終シラブルの直前から急激な下降が見られる。

普段の言い方と、「なまいきイントネーション」での言い方で、共通する「イッテマセ」ン」という形式の一音ごとの長さを計測し、それぞれの発話時間を棒グラフにして、図3に掲げる。この図の縦軸の数値は、秒数を示している。

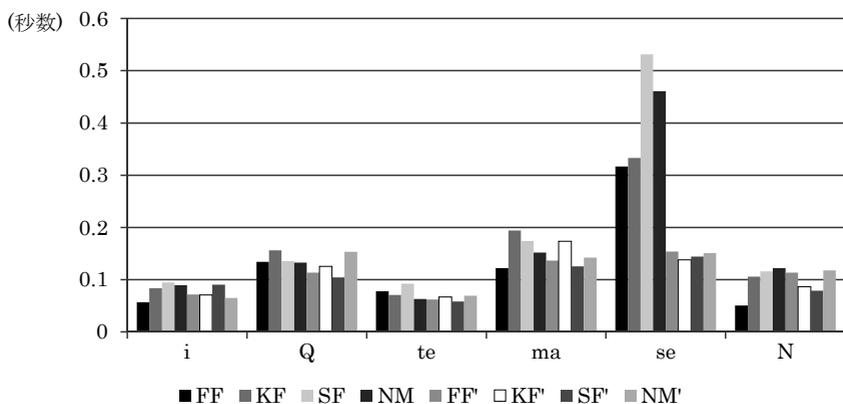


図3 一音毎の長さの比較

図3をみると、「なまいきイントネーション」の場合（FF、KF、SF、NM）でも普通の言い方（FF'、KE'、SF'、NM'）でも、ほとんどの一音を0.1秒前後の長さで発話していることがわかる。しかし、「なまいきイントネーション」での「セ」は0.3秒～0.5秒の長さで発話している。「なまいきイントネーション」での引き延ばしは、文末の最終シラブルだけを延ばすものである。

「なまいきイントネーション」は、「言ってマ」セーン」「知って」マース」「ちゃんとしてクダ」サーイ」など、特殊モーラや独立性が低い最終モーラを含むシラブルを引き延ばしている。イントネーションが確実に聞こえるように、シラブル単位で引き延ばしていると考えられる。「言いマシ」ター」「いつデス」カー」の「タ」や「カ」はア段であり、広い母音で発音されるため無声化せず、そこが引き延ばされる。

図2と図3から、「なまいきイントネーション」は、「イッテマ」セーン」という、最終シラブル直前からの急激な下降の後に、その低い位置を持続し、そのまま延ばして発話されることがわかる。

2.1.2. アクセントの消去

初めに(1)(2)で示した用例について、福岡方言アクセントと比較したものを表にして以下に示す。

(3)

福岡方言アクセント	なまいきイントネーション
イッテマセ]ン	イッ[テマ]セーン
イーマ]シタ	イーマシ]ター ^(注5)
ショーコア]ルンデスカ	ショーコアルンデス]カー
アリマ]ス	アリ]マース
サ]トーガキータマ]シタ	サ(])トーガキータマシ]ター
シ]ミズモデ]ス	シミズモ]デース
ソナナ]ンショーコナリマセ]ン	ソナナ(])ンショーコナリマ]セーン

上の表をみると、いずれも本来の福岡方言アクセントを消す形で発話されている。ただし、4名に調査する中で、同一の話者でも「佐藤が聞いてました」「そんな証拠になりません」などの、ある程度長い文になる時は、最終シラブルまで平板になる場合と、アクセント核で下げる場合がみられた。これは同じ福岡方言の話者間でも判断に揺れがある部分であるため、(3)に示した表では、その箇所は「(]）」のように括弧をつけている。

これらのことを、F0曲線の形で示し、以下に掲げる。図4はアクセント核を

持った名詞を含む文「佐藤が聞いてました」を、「なまいきイントネーション」で発話したものである。普段の言い方ではアクセント核がある語「サ」トー（佐藤）」も、「なまいきイントネーション」では最終シラブルまで句全体がイントネーションに覆われ、本来の方言アクセントを消す形で平板に発話されていることが見てとれる。最終シラブルの直前で急激に下降し、その後そのまま低い位置が持続されるのは、「イッテマセーン」の場合と同様である。「キーテマシタ」の「シ」は無声化するためアクセント核を持たず、その直前の「マ」から下降している。

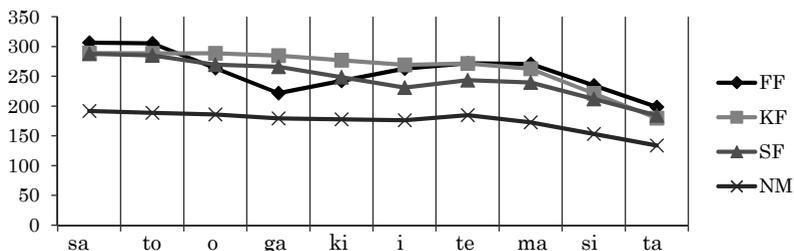


図4 「なまいきイントネーション」での「サトーガキーテマシタ」

次に、「そんなん証拠になりません」というある程度長い文を、「なまいきイントネーション」で発話したものを、以下の図5に掲げる。

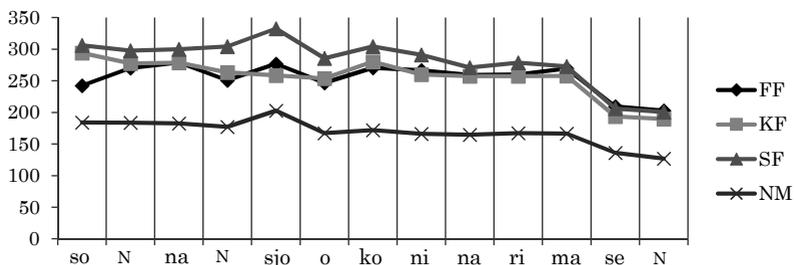


図5 「なまいきイントネーション」での「ソナンショーコニナリマセン」

ある程度長い文であっても、「なまいきイントネーション」で発話される場合は、最終シラブル直前までは平板化していることがわかる。

2.2. 位相的特徴

先に述べたように、「なまいきイントネーション」における発話では、方言形ではなく、共通語の丁寧体が用いられる。したがって、全国各地で同様の現象が見られる可能性が考えられる。そこで、全国各地の話者（計25名、福岡県以外の年代は20代から30代前半（2011年調査時）^(注7)）に、使用の有無についてアンケート調査を行った。アンケート調査では、下記の①～⑥を尋ねた。

- (4) ① 小学生の時、同級生とどちらが先に悪口を言ったか、口げんかになった際に、「言っていない」と強く言い返す場合、何と言いますか。
- ② 上記の①の場合、「イッテマ」セーン」と言うことができますか。
- ③ 上記の②に言い返すとして、「イーマシ」ター」と言うことができますか。
- ④ (以下は上記の②③の言い方について) 誰に対して使いますか。
- ⑤ 今でも使いますか。もし今では使わなければ、何歳くらいまで使用していましたか。
- ⑥ このような発話をされた時、どのように感じますか。

①は自由に回答してもらい、②で「なまいきイントネーション」の使用を確認した。さらに「なまいきイントネーション」での返答が可能かを③で聞いた。④、⑤は位相による使用の違いがあるのかを調べた。⑥は、「なまいきイントネーション」の音声的特徴が、このイントネーションを使用する地域としないうち地域によって、どのような印象を与えるのかを調べた。

調査の結果、「なまいきイントネーション」は、福岡県、長崎県、熊本県、宮崎県^(注8)の話者（図6の●）にのみみられた。共通語形を用いているにもかかわらず、九州地方のみ、特に肥筑地方においてみられる現象であるといえる。

使用がみられないという地域は、その土地の方言形を用いるという回答であったため、口論の際に「言っていない」というような共通語形を使って発話す

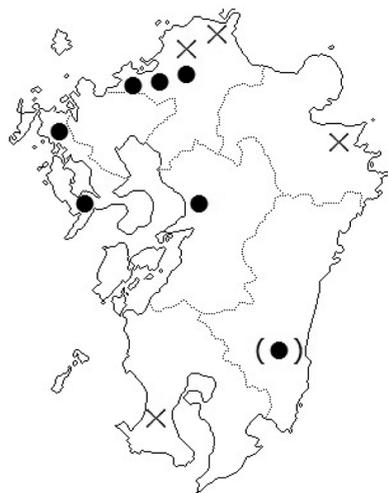


図6 「なまいきイントネーション」を使用する地域

るかも併せて尋ねてみた。そうしたところ、「イッ[テマ()セーン]のように下げずに発話する型と、「イッ[テマセ]ンー」のように最終モーラを延ばす型の回答があった。これに対し、「セー」を下げる型の発話は、どの話者も「不可能」もしくは「聞いたことがない」という反応であった。

「なまいきイントネーション」の使用において特筆すべき特徴は、小学生においては頻繁に使用されるが、中学生ぐらいまでは使用したとしてもその後は使用されなくなる、という点である。最終シラブルを下げない型や、最終モーラを下げて引き延ばす型であれば、成人後も使われる。しかし、このイントネーションはその使用時期が限られており、この点において他地域の単なる引き延ばしとは異なるものであるといえる。

また「なまいきイントネーション」が使用される相手は、目上には使用することができず、自分と同等の近い関係である場合が多い。そもそも小学生で頻繁に使用されるため、目下という相手は想定しづらいが、例えば小学6年生の児童が小学1年生に向かって、このイントネーションを用いて言い合いをすることはない。ただし年齢差はあっても、兄弟間などでの使用はみられる。

さらに、その使用についての調査を福岡県では世代別に行った。その結果、このイントネーションを用いていたという報告があったのは、現在40歳から15歳までの間の世代であった。15歳というのは今回の調査者の最年少であり、実際はまだ下の世代も使用していると考えられる。しかし、同じ福岡地方出身者の中でも、55歳男性（宮若市）、53歳男性（福岡市）は用いていなかったという。今回は、福岡地方における世代間調査しか行うことができなかったが、他の肥筑地方でも同様のことが予想される。このイントネーションは、40代くらいから下の世代に見られる、新しいイントネーションの型であると考えられる。

3. 「生意気」である理由

「なまいきイントネーション」は、小学生くらいの児童が、共通語の丁寧体を用いて発話するものであった。児童期は、まだ待遇価値を意識した発話をし慣れていない、敬語を使い慣れていない時期である。その時期の「子ども」が、同級生にあえて敬語を使うということは、自分は相手と同じ「子ども」ではなく、「大人」だと示そうとする意図をもって使っているのではないか、口論をしている事態に対して「大人」の立場から、客観的に発言しているように振る舞っているのではないかと考えられる。「子ども」が、そのような大人ぶった態度を見せるところに、「生意気さ」が感じられるのであろう。

普段は敬語で話す必要のない、同等の関係の同級生に向かってわざと敬語形を用いることは、慇懃無礼に相手を挑発することにつながる。したがって、目上である「担任の先生」などに対して用いられることはない。敬語で話す必要のない相手という意味では、親や兄弟も同様であり、これらに対してもしばしば用いられる。^(注9)しかし、成長していくにしたがって、目上の人物に対しては敬語を用い、同等や目下の人物に対しても、敬語は使わなくとも様々な配慮に基づいた発話が多くなる。それに伴い、「なまいきイントネーション」は使いにくくなり、次第に使用されなくなるものと考えられる。

「引き延ばし音調」について、森山（2004）では「冗談性」というメタ的な意味付与があることを指摘している。「なまいきイントネーション」においても、敬語の丁寧体であっても引き延ばすことで、文字通り「敬意を払って丁寧に言っている」ことを意味しない「冗談性」が示されるものと考えられる。このイントネーションでは、「冗談性」を象徴する引き延ばしの部分を急激に下げ、低く発音することで相手にその意図を明確に提示している。

「なまいきイントネーション」を用いる話者である「子ども」は、水掛け論に陥りそうな事態を、「大人」として振る舞うことで相手より優位に立つことを目指していると考えられる。しかも、「大人」として下した判断は「正しい」ことが明白であり、これ以上議論の余地はないとして、もはや真剣に取り合う必要はないと一笑に付している。相手の発言に対してふざけて真剣に取り合わないということは、相手を挑発し不快感や苛立ちを与える結果になる。そこで受け手も、自分も同じく「大人」として発言していることを、同様のイントネーションを用いて反撃する。「子ども」の「言い合い」ではない、「大人」の「議論」としての振る舞いが、「なまいきイントネーション」であると考えられる。

4. まとめと今後の課題

本稿では、以下に示すような特徴を有するイントネーションを「なまいきイントネーション」と名付け、こうした諸特徴が意味するところについて考察した。

- (5) a. 共通語における丁寧体の言い切りの形で用いられる。
- b. 文の最終シラブル直前までは平板で、そこから急激に下げ、引き延ばしを行う。
- c. 発話する相手は、自分と同等の近い相手に限られる。
- d. 児童期に頻繁に用いられ、年齢を重ねるとともに用いられにくくなる。

e. 肥筑地方に見られる、新しいイントネーションである。

地理的分布については十分な考察には至っておらず、各方言における音調との関係を視野に入れながら、さらなる考察を行っていきたい。たとえば、福岡市と北九州市はアクセントの型が異なる地域であり、アクセントとの関連も調査する必要があるだろう。

また、このイントネーションは、福岡県下の小学生が作文を読み上げる際に、最終シラブルを下げて読む型と類似している。同様の現象として、児童に帰宅時間を呼びかける放送において、「[みな]さーん、帰りの時間になりました]たー」のように、この型を用いるという現象もある。このような、作文の読み上げや放送という「事務的な発言」からの影響も視野に入れていきたい。

- (注1) 話者 (FF) は26歳女性 (2012年調査時)、生まれてから現在まで福岡市で生活している。
- (注2) 話者 (KF) は25歳女性 (2012年調査時)、生まれてから18歳まで熊本市、19歳から現在まで福岡市で生活している。
- (注3) 話者 (NM) は28歳男性 (2012年調査時)、生まれてから18歳まで長崎市、19歳からは北海道、26歳からは福岡市で生活している。
- (注4) 話者 (SF) は23歳女性 (2012年調査時)、生まれてから18歳まで長崎県佐世保市、19歳からは福岡市で生活している。
- (注5) 福岡方言形の「イーマ]シタ」と、「なまいきイントネーション」による「イーマ]シ]ター」の下がり目の違いについて、表記では異にしているが、これはしばしば同じであると考えられる。「マシタ」の「シ」が無声化しているため、そこに下がり目を考えるのは不自然である。しかし、はっきり「シ」まで発音した際にはやはり上記のような違いがあると考え、別表記にしている。
- (注6) 句全体でアクセントがなくなり、イントネーションに覆われて発話される現象は、早田 (1985)、久保 (1989) で、福岡方言の疑問詞疑問文において報告されている。また、定延 (2005) においても、共通語でおどけたように発話する「[でー]き[た]「知ー」ら[ない]も、本来のアクセントを消す形で発話されていることを指摘している。
- (注7) 北海道苫小牧市、宮城県仙台市、愛知県東海市、埼玉県春日部市、茨城県高萩市、富山市、滋賀県大津市、和歌山市、神戸市、広島市、広島県福山市、愛媛県、福岡市、福岡県北九州市、福岡県宮若市、福岡県飯塚市、福岡県前原市、大分市、長崎市、長崎県佐世保市、熊本市、宮崎市、鹿児島県南さつま市、沖縄県浦添市
- (注8) 25歳男性 (宮崎市出身) の回答では、使用していたということであった。しかし、同じ宮崎市出身の25歳女性 (2012年調査時) の回答では、使用しない、聞いたことがないということであった。したがって本稿では考察に含めず、図6には(●)として示した。
- (注9) 24歳女性 (飯塚市) の回答では、今でも妹に対してであれば用いることがあるという。

参考文献

- 久保智之（1989）「福岡市方言のダレ・ナニ等の疑問詞を含む文のピッチパターン」『国語学』156
- 定延利之（2005）『ささやく恋人、りきむりポーター 口の中の文化』岩波書店
- 早田輝洋（1985）『博多方言のアクセント・形態論』九州大学出版会
- 森山卓郎（2004）「引き延ばし音調について」『文法と音声Ⅳ』くろしお出版

【謝辞】 本稿は、第236回筑紫日本語研究会（2011年5月14日、於九州大学箱崎キャンパス文学部棟4階会議室）における口頭発表、第26回日本音声学会全国大会（2012年9月30日、於大東文化会館）におけるポスター発表をもとに、まとめたものである。発表の席上ほかで色々と貴重なご意見を賜ったことに対し、心より感謝申し上げます。

（かどや たかてる・本学大学院博士後期課程）